指揮棒のおはなし

～ How To Conduct Music ～

Vol. 5

PICKBOY
NAKANO CO., LTD.

川本貢司が語る
歌劇場の指揮者のおはなし

Chapter 1 ドイツ・フォアポンメルン歌劇場の第一専属指揮者に

ドイツのフォアポンメルン歌劇場の第一専属指揮者になったのは28歳のとき、2001年のことです。ベルリンに住み始めた頃、知り合いから「第一専属指揮者のポストが空いているから」と言われてオーディションを受けにいったのがフォアポンメルンでした。

最後のオーディションは、ヴェルディの没後100周年記念ガラコンサートを実際に振るというもの。ヨーロッパの指揮者の最終オーディションは、多くの場合、オーケストラだけを振る一次選考で選ばれた人間に、本番を振らせるんです。

当時ヴェルディをそれほど知っているわけではなかったし、ガラコンサートなのでなにしろ曲数が多い。ベルリンには最小限の楽譜しか持って来ていなかったので、あわててスコアを買いに行きました。それで1か月の生活費の半分くらいが飛んでしまいましたが（笑）、でもオーディションを受けられるのはありがたかったし、結果それで通ったので

よかったです。

結局、フォアポンメルン歌劇場には6年いました。第一専属指揮者というのは音楽監督のひとつ下のポジションで、音楽監督のサポートをしつつ、自分のプロダクションも持つことができるという立場です。当時、ドイツに来た外国人がいきなり第一専属指揮者になることはまずないそうで、周りからは「幸運だった」と言われました。

ドイツでは多くの場合、指揮者はまず練習ピアニスト（コレペティトール）として歌劇場に入ります。歌手の伴奏をしながらオペラコーチングなどを覚えて

から、まず《こうもり》とか《魔弾の射手》を振ってみて、うまく行くと指揮者のポジションがもらえるという流れが普通です。だから、オーディションを受けて通ったというのは本当に運がよかったと思います。

Chapter 2 オーケストラピットで必要な指揮と指揮棒

ドイツの歌劇場は、指揮者に対して「こうしてほしい」ということをいろいろ言って来ることがありますが、その意見を総合すると、だいたい３つくらいに集約されます。

まず、「1 拍目は絶対に縦に下ろしてくれ」ということ。これには理由があって、オペラの楽譜というのは弦楽器も含めて休みの小節が多いんです。その休みを数えるときに拍ごとに数えているのは大変ですから、1 拍目で数えていくようになります。そのときに棒が縦に下りていれば、どの方向から見てもそこが 1 拍目だとわかるわけで、小節数を数え間違えることがなくなるということ。もちろん、弾いていても指揮を見ることに神経を使う割合が減る。これは後で話しますが、毎日のように演目が変わるという歌劇場ならではの事情もあります。

「1 拍目を縦に」というのは世界中で共通する指揮法の基本ではありますが、日本だと「3 拍子は三角形を描くように」と習うことが多い。それだけは自分でも修正して、3 拍子であっても 1 拍目は縦に下ろすようになりました。

２つ目に言われたことは、「黒い服を着てくれ」ということです。僕が知る限りピット内はだいたい壁を黒く塗ってあるのですが、指揮者の後ろに白い布をかけてあることが多い。指揮者が黒の燕尾服を着れば、指揮棒がくっきりと見えることになります。

ピットの中では指揮棒は必須。色は白が好まれる

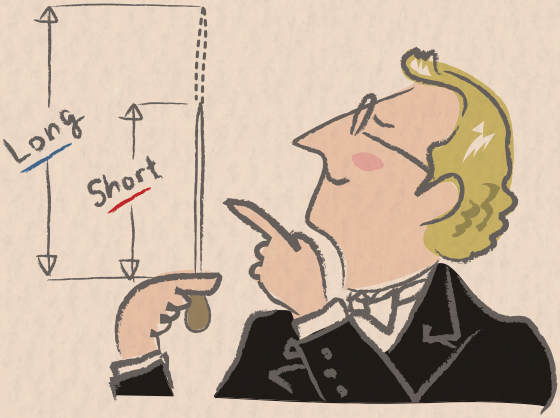
肝心の指揮棒に関してはどうかというと、実は「こうしてほしい」とはっ

きり言われたことはありませんが、まず白い指揮棒が好まれるということ。先ほど言ったように、ピットの中で、黒い服を着た指揮者との対比で見やすいからです。木の色そのままの指揮棒でも見えることは見えます。「ヨーロッパのコンサートホールや歌劇場は客席の壁が木でできているから、それとの対比を考えたときに白の方がいい」と言う人もいますが、ヨーロッパでは演奏中は客席を真っ暗にしてしまうことが多いので、あまり関係ないと思います。とは言え、白い指揮棒の方が好まれるのは事実です。

オーケストラピットの中では、指揮棒を持たない指揮者は嫌がられますね。シンフォニーであっても奏者はずっと指揮を見ているわけではありませんが、特にオペラの場合は、ドイツの歌劇場ではほとんどレパートリーになっている曲で回していますので、1回リハーサルをしてからプレミエ公演をした後は、ほとんどリハーサルなしで本番を迎えるんです。しかも毎日演目が変わるということさえあります。それは僕にとっても大変なことですが、オーケストラにとっても負担が大きく、楽譜から目が離せないことになります。その状態でも指揮を視界に入れるために、指揮棒は絶対に必要になるんです。

指揮棒は手の延長であると同時に、「指揮棒の先端」という「点」があるために、指揮がより明瞭になるんですね。特に今お話ししたような状況では、「指揮棒がないとどこに注目していいかわからない」と言われる指揮者もいました。

Chapter 3 その人の身体に合った指揮棒選び



フォアポンメルンを振り始めたときは40cmくらいある細くて長い指揮棒を使っていましたが、その頃からいろいろな指揮棒を試すようになりました。そして、最終的に重要なのはやはり「はっきりと見えること」だということがわかりました。

オペラの指揮をする人で、上の世代の人は太くて長い指揮棒を使う人が多い。小さな動きで大きく見せることができるというメリットがあるからでしょう。様々な条件から、オーケストラピットでオペラを振る際には、注意を呼びかけなくても常に視界に入るような指揮でないといけないわけです。

でも「指揮棒も楽器」ですから、指揮棒選びというのは、その人の身体に合っていることも必要だと思います。大きい人なら長い指揮棒を振ってくれた方が見やすいですが、小さい人が長い指揮棒を振っていると、燕尾服の黒から出る部分も多く、見にくいということもあるのではないでしょうか。もちろん身体の前で振るというのは基本ですが、それだけでは表現の幅が限られてしまうので、いつも体の前だけで振っているわけではありませんけれどね。

僕自身は現在、PICKBOYの26cmの

木製指揮棒を使っています。かなり短いものですが、これは自分の視界に入り切る長さでもあるし、重さを含めて僕にとってコントロールしやすい長さでもあります。もちろん、シャフトの色はホワイトです。

その上で、オペラを振るときにはシンフォニーオーケストラを振るときよりも見やすい棒を心がけています。シンフォニーオーケストラの場合は練習を何回か重ねてから本番ですから、ある程度遊びのようなものを入れても大丈夫なんです。もちろんオペラでも毎回同じことをやっていては飽きてしまいますが、それでも機能的に見てわかりやすい指揮をするということは心がけています。

個性が強いオケは大歓迎だが フレキシビリティは必要

フォアポンメルン歌劇場や、その後音楽監督を務めたピルゼン放送交響楽団などは「自分のオケ」でしたから、全員顔もわかっているし、誰が何をやらかすかもよくわかっていました。ではそうでないオーケストラを指揮するときにまずどこを見るかと言うと、可愛い女の子 ── は冗談として(笑)、まずコンサートマスターと低音楽器とティンパニですね。高音楽器と低音楽器、それと打楽器って、同時に弾いても音が出るタイミングは違いますから、それをわかっていて、まとまっているオケは構造上問題が起こることが少ない。

そして良いオーケストラというのは、独自のカラーを持っています。個性が強いオーケストラは決してやりやすいわけではありませんが、最終的に良いものができる確率は高い。だからと言って、フレキシビリティのないオーケストラはダメです。何か新しいことを提案したときに扉を閉ざしてしまうようなところは、良いものが生まれる可能性そのものを否定してしまっていることになりますから。

［profile］ **川本貢司（かわもと・こうじ）**

島根県生まれ。第10回東京国際音楽コンクール指揮部門に22歳の若さで入賞。第59回「プラハの春」国際音楽コンクール指揮部門において第3位。
2001年よりドイツを拠点に国際的な指揮活動を展開。2001年～2007年、フォアポンメルン歌劇場第一専属指揮者ならびに北東ドイツ・フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者を兼任。2008年～2014年、チェコにおける初の日本人音楽監督としてピルゼン放送交響楽団を指揮。また、スロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団、プラハ放送交響楽団などの名門オーケストラを筆頭に、チューリンゲン・フィルハーモニー管弦楽団、ヴュルツブルク・マインフランケン歌劇場、クラスノヤルスク交響楽団、イスタンブール国立交響楽団、マラガ交響楽団など、欧州、北米、ロシア、アジアの40以上のオーケストラを指揮し、現在に至るまで客演を重ねている。国内においては東京フィルハーモニー交響楽団、札幌交響楽団、京都市交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、広島交響楽団等、各地のオーケストラと共演。近年は、2013年4月の浙江交響楽団との共演を契機に、中国においても非常に高い評価を確立し、深圳交響楽団、西安交響楽団、青島交響楽団、河北交響楽団をはじめ、中国全土で日本人指揮者としては類を見ない数の客演を重ねている。
東京芸術大学音楽学部指揮科を卒業。在学中に指揮法を若杉弘、小田野宏之、遠藤雅古、フランシス・トラヴィス、学内のマスタークラスにおいてヴァレリー・ゲルギエフ、セルジュ・チェリビダッケ、渡米後にグスタフ・マイヤーの各氏に師事。生涯の師と仰ぎ、最も影響を受けた指揮者であるシャルル・デュトワ氏からは、リハーサルに帯同する許可を受け、2009年より世界各地で巨匠より直々に薫陶を授かり「音の魔術師」の神髄を会得する。

●ホームページ　http://www.kojikawamoto.com